

和歌山県紀美野町における動物の民俗

俵 和 馬

はじめに

和歌山県の山間部、海草郡に位置する紀美野町は、伝統的に国内産シュロの生産地としてその名が有名である。また、近年では県外からの移住者が増加し、いわゆる「田舎暮らし」の成功例としてしばしば取り上げられる。このように、伝統を守りつつ全国的に先進的な地域といえる一方で、紀美野町の生業を顧みると、和歌山県の「山の文化」を色濃く残している地域でもある。にもかかわらず、今日まで当地における民俗例をまとめた民俗誌はほとんどみられない。

近畿大学文芸学部では、平成二四年（二〇一二）より現在まで、当地にて夏期・冬期合わせて毎年二回の民俗学実習を実施している。学生たちは衣食住、生業、娯楽、環境など、思い思いのジャンルについて聞き取りをおこなっている。ここでの調査によって、紀美野町には、いまだ豊富な民俗的知識が残っていることが明らかになってきた。そこで本論文では、筆者や学生たちが聞き取り調査をおこない収集したさまざまな民俗のうち、動物に関するものを特に取り上げ、そこから紀美野町の動物の民俗を俯瞰することを目的とするものである。本論文がまだまだまとまった民俗誌がない紀美野町の、今後の調査の足がかりとなれば幸いである。

調査地の概要

紀美野町は平成一九年（二〇〇九）に野上町と美里町が合併しうまれた町である。当地は山に囲まれた谷あいの町で、貴志川と真国川という河川を有し、合流している。これら河川は、水産資源など豊かな恩恵を与えてきたが、昭和二八年（一九五三）の集中豪雨による「七・一八水害」を引き起こし、山津波や道路の決壊、多数の犠牲者という被害をもたらした。

産業については、近代以前より、稲作、畑作、山樵のほか、箒やたわし、漁網の原材料となるシュロや、和ろうそくの原料ハゼの栽培が盛んであった。特にシュロを利用した産業は全国的に有名である（『角川日本地名大辞典』

編集委員会 一九八五）。

真国川流域の西野地区、東野地区、貴志川流域の国吉地区は比較的平地が多く、畑や水田が広がっている。対して、貴志川上流部の毛原地区は谷あい立地し、斜面を利用した畑作や狩猟が盛んにおこなわれている。

一 哺乳類

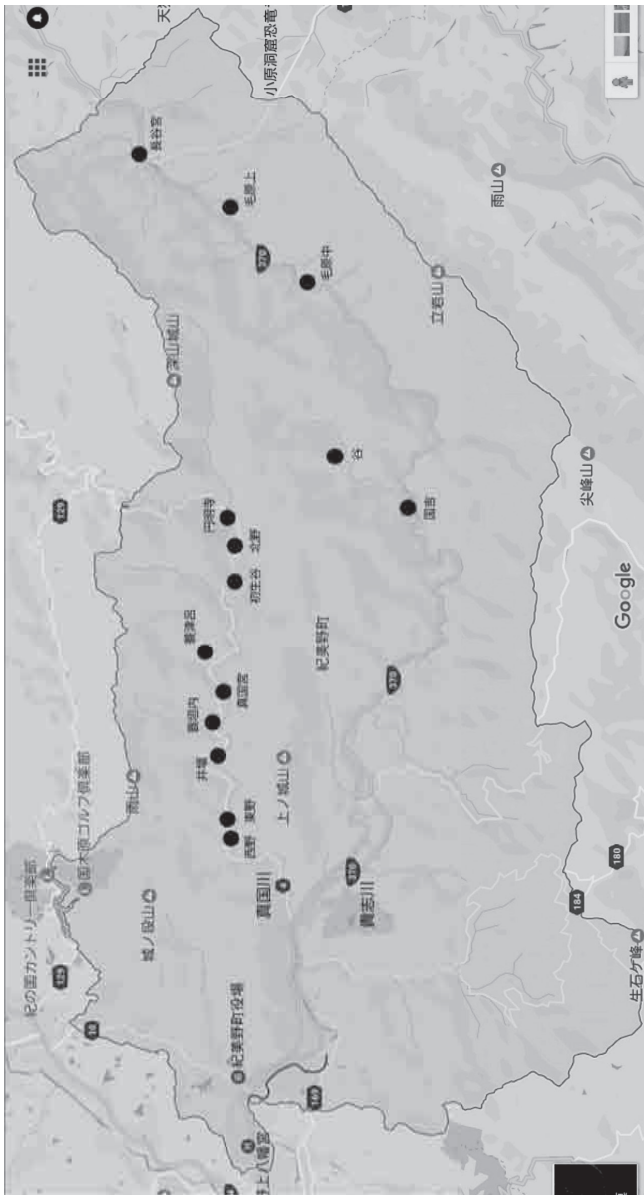
（一）イノシシ

紀美野町で狩猟について聞き取りをおこなうと、まず聞かれるのがイノシシについてである。現在はワイヤーによるくくり罠、檻、そして銃を用いた猟がおこなわれているが、かつては猟犬を伴った銃猟が主流であった。イノシシを狩猟する手法は時代を経るごとに変化を見



▲写真1 シュロ（撮影：絹川諒介）

和歌山県紀美野町における動物の民俗



地図 1 調査地



▲写真2 イノシシの幼獣（撮影：角谷康浩）

けたかを判断する。

以上の痕跡も、時にはまったく見かけられない場合もある。その時には「道」を探す。イノシシが決まって歩く道をタツマと呼ぶが、これを確実に把握するには五年から一〇年以上の経験が必要であった。熟練した猟師たちは足跡、木々の泥、タツマを巧みに見分け、着実に獲物に近付いていくのである。

狩猟対象のなかで、イノシシは高級な獲物であり、長谷宮では昭和七年（一九三二）ごろまでイノシシ猟のみで生計を立てている方もいたようである。それゆえに、狩猟の現場は一種の緊張感を伴っていた。以下に長谷宮のかつての狩猟の様子を紹介したい。

せているが、その経験知・自然知はいまだ連綿と生き続けている。

狩猟を成功させるためには、対象の行動を読む必要がある。そのため猟師たちは、様々な痕跡からイノシシの気配を探るのである。まず、イノシシの足跡を見ることでその動向を先読みする。特に、雨が降ったのちのぬかるんだ地面は、足跡を刻銘に残し、猟師たちにとって狩猟の格好のタイミングであった。しかし、足跡が古いこともあれば、消えてしまっている場合ももちろんある。その場合には、木々や草むらに残された痕跡を探る。イノシシの特徴的な生態としてヌタウチ（沼田うち）がある。ヌタウチとは、ヌタバと呼ばれる湿地や湿地でおこなう泥浴びのことだ。これは寄生虫を身体から落とす、体温調整をするなどの説がある。ヌタウチを終えたイノシシは当然、体中に泥をまといながら、この状態のイノシシが木々や草むらの隙間を通ると、そこに泥がつくのである。猟師たちはこの痕跡を見て、イノシシがいつの時点でそこを通り抜



▲写真3 イノシシに荒らされた畑



▲写真4 有害鳥獣撃退ロケット花火

猟師たちは数名でチームを組み、山々を駆け巡りイノシシを追いつめた。一日でイノシシを追いつめられない時には数日間もイノシシを追いかけたという。ついに追いつめたと思っても、山向こうの猟師たちと直面し、どちらが追いつめたイノシシかで論争が起きたこともあった。そういった問題を乗り越え、ついにイノシシを仕留めてからも気は抜けなかった。イノシシが倒れた際、四本の足を縄で縛るその場に居合わせた者のみが肉を分配できる、というルールが存在した。そのため、銃声を聞いた猟師は我先にイノシシの所へ駆け寄ってきたのだという。なお、鉄砲だけを持った者と猟犬を連れた者では分け前の量が違い、後者はより多く分配された。これはパートナーである猟犬の食糧の分を追加していると考えられる。

以上のように、イノシシは人々に豊かな恵みをもたらす反面、それを奪う存在でもあった（写真3）。全国的にもシシガキ（シシ垣）など、イノシシの獣害を防ぐための物理的、精神的な対処の民俗が見られる。イノシシは作物を食害するだけでなく、ヌタウチによつて実ったイネを倒してしまふ。イノシシのヌタウチで倒されたイネは獣臭く、食べられない状態になってしまう。そのため、カカシやオドシツツ（脅し

筒」と呼ばれる空砲で驚かして追い払っていた。現在では、獣害対策用のロケット花火で音を発生させて追い払っている（写真4）。また、近年では食害がひどいため、電気柵やトタン板、テグスで囲った田畑をしばしば目にする。

イノシシによる田畑への害は、紀美野町で聞かれる伝承にも表れている。それは紀美野町で「立岩伝説」と呼ばれている。これについては、長谷、毛原地区周辺の伝承をまとめた書籍に紹介されているので、少し長くなるがここで引用したい。内容は以下の通りである。

毛原宮の東のはずれ、貴志川の流れの真ん中に屹立する巨岩、これが伝説の「立岩（たちいわ）」です。

「……」祭神は「立岩明神」でこれは「狩場（かりば）明神」と同一人物と思われ、岩そのものが御神体です。「……」地元では「狩場さん」として親しまれ、長谷と毛原の鎮守社に丹生津姫と共に祀られています。「……」。

さてそのころのことです。長谷毛原の住民たちは、田畑を荒らすイノシシの害に苦しみぬいて、領主に訴えました。すると早速狩場さんが天野からやつてきました。村人たちから話を聴いた彼は、使い慣れた弓と愛犬を携え、イノシシを退治すべく犬飼谷（いぬこだに）へ入っていきます。やがて犬に追われた獲物が現れました。しかしそれは想像を超えた巨大なイノシシだったのです。「……」臆することなく立て続けに矢を放ちます。ところが矢は命中するのですが跳ね返って刺さりません。次第に追いつめられた彼はとうとう谷の入り口まで押し戻されました。

そこで目についたのは川中に横たわる大きな岩、彼はその上で飛びあがり、なお射続けようとなりました。しかしびくともしない大イノシシはその岩に飛びつき、今にも狩場さんを牙にかけようとしています。絶体絶命となっ



▲写真5 軒下のイノシシ肉



▲写真6 イノシシの肝

た彼はついに祈りました、「岩よ、汝に心あるなら我を助けよ」、すると「……」横たわっていた巨岩がぶるぶると振動し地響きを立てて起き上ったのです。狩場さんははるか眼下のイノシシを狙いすまし、最後の一矢を放ちました。矢はみごと両眼の真ん中に深く突き刺さり、イノシシは「……」川の中に倒れました。こうして長谷毛原の山野に平穏が訪れました。〔森下 二〇一六 八一―九〕

この伝承は、聖性地形である奇岩を信仰の対象としている点で興味深い。また、イノシシ害の克服を伝えている点に関しては示唆的な伝承である。すなわち、紀美野町でのイノシシによる害を、近代以前より狩猟によって対処していたということである。そのため、立岩は狩猟の成功を祈る場にもなっている〔森下 二〇一六〕。イノシシ猟の前には立岩へ参り、酒を供えその成功を祈願する。今日ではこのような風習は見られなくなっているが、今でも毛原周辺では残っているようだ。原初からの人とイノシシを取り巻く風景が紀美野町にはいまだ残っている。

いわずもがな、狩られたイノシシは食肉として一級であった（写真5）。

また、内臓を薬として食することもあった(写真6)。胆嚢には解毒作用があり、飲むと二日酔いにならないといった。肉以外の部位も多いに活用されていた。毛皮は硬く、保温性が高い。そのため、腰巻やソデナシ⁽³⁾に加工された。大型のイノシシから取れる牙は装飾品に煙草入れのネジメ⁽⁴⁾など装飾品に加工された。

ところで、紀美野町でイノシシについて聞き取り調査をおこなうと、「今のイノシシはイノブタである」としばしば耳にする。イノブタとはその名の通り、イノシシとブタの雑種である。⁽⁵⁾イノブタは肉質がイノシシと異なり、脂肪分が多いという。また、イノシシはウリボウ(イノシシの幼獣)を一頭しか育てないが、イノブタはブタの血により多産になりウリボウが何頭も連れているという。これについて和歌山県のある農業担当職員に伺ったところ、DNA検査の結果では、イノブタのそれはほとんど残っていないという。また、出産量の変化については、元々イノシシは多産であるが、餌不足ゆえに一頭しか見られなかったのだろうということであった。整理すると、環境の変化によりイノシシの生態が変化し、そこにブタとの混血というストーリーが合わさったと考えられる。

(二) シカ

シカによる農作物への食害は、イノシシと同じく深刻な問題である。電気柵などの対策を講じても、軽く跳躍してしまうため防ぐことが難しい。また、スギやヒノキといった樹木に角をこすりつけ皮が剥がす、新芽を食害することなど、林業にも悪影響を及ぼしている。そのため今日では狩猟の対象となっているが、かつては狙って狩猟されるわけではなかった。イノシシに比べるとシカ肉は味が劣り(しかし、刺身は美味であるという)、紀美野町では食用として狩猟されることは今も昔も少ない。だが、その立派な角が部屋や道具小屋に飾られている例は多い(写真7、8)。これは装飾のほか、刀などの台や鉤として用いるためであるが、一方で狩猟の技量などを示す指標にもなっているのではないだろうか。

猟の対象となっていた。これは、カモシカの肉が非常に美味であったからだ。カモシカは「シカ」と付くものの、ウシの仲間であるため、肉質香味が良かったと想像できる。そのためであろうか、古老の中にはニクという方言名で呼ぶ方もある。なお、この呼び名は和歌山以外の地域でも見られるものである。⁽⁷⁾その他、毛皮も利用された。紀美野町の方々は、近年、狩猟を禁止した影響でカモシカが増加したと感じている。これについて、先の農業担当職員のお話では、正確には個体数が増加した訳でなく、生息域が拡大したために目につきやすくなったのでは、との返答を得ている。



▲写真7 飾られたシカの角



▲写真8 道具小屋のシカの角

なお、シカはタチという植物を好んで食すというが、現状ではその同定ができていない。

(三) カモシカ

「羚羊（かもしか）のような足」という表現があるが、これは元々レイヨウ（アンテロップ）のことを指しているといい、本来のカモシカは屈強な足で岸壁をも登る動物である。現在は特別天然記念物に指定されているため、⁽⁶⁾捕獲は禁じられているが、かつては狩

(四) サル

紀美野町には「おいつぼの話」という伝承があり、それにはサル（ヒヒザル）が登場する。内容は以下の通りである。

娘の夢に表れた観音様が、娘がヒヒザルにさらわれてしまうことを予言し、壺の中に隠れるように告げる。その後、お告げの通りヒヒザルが現れ、壺ごと娘をさらう。壺を背負ったヒヒザルが山へ行き、滝の下の淵の辺りへ来た時、娘は手に持っていた簪をわざと川に投げ込んだ。そして「それは母の形見で大事な物であるから拾ってほしい」と伝える。娘に惚れたヒヒザルは川へ飛び込み簪を探したが、背負っていた壺が重く、最後は溺れてしまった。そのため、その淵を「おいつぼ」と呼ぶ（筆者要約）。

この物語には、「娘を娶ったサルが、娘の要望に応え、背中に背負った物（白や水瓶）のために最後には溺死してしまう」というパターンが見受けられる。これは異類婚姻譚の「猿智入り」に相当する伝承といえるであろう〔福田・神田・新谷・中込・湯川・渡邊 二〇〇六〕。

多くの場合、顛末はこの通りであるのだが、まれにヒヒザルが娘連れ去る経緯が異なる場合の語りが聞かれることがある。これについては、今後、その分布も含めて調査を続けていく必要がある。

(五) イヌ

イヌは有史以来の狩猟における人間とのパートナーである。弘法大師を高野山に導いた狩場明神も白黒二頭の猟犬を携えている。和歌山には紀州犬という犬種が存在し、狩猟犬として好まれていた。

紀美野町では、猟犬をシシイヌともいう呼び名で呼ぶ（写真9）。シシイヌには雑種でもなれるが、紀州犬が最適とされている。これは猟犬としての仕込み（教育）を施しやすいためである。猟犬として仕込む際には、より猟



▲写真9 獵犬

への欲が強いものを選んでいく。そういった紀州犬への需要に対し、今日でいうところのブリーダーのような役職を持つ者もかつていたという。その後、戦後のハンターブームの際にはポインターなど海外の犬種も獵犬として用いられていた。

(六) ウシ

イヌが狩獵のパートナーとするならば、ウシは農業のパートナーであった。日本で農業が機械化される昭和のパートナーであった。関西で犂や馬鍬などを引かせる対象は主にウシであり、これは紀美野町でも例外ではなかった。ウシは多くの場合、一家に一頭飼育していたが、中にはみずから飼育せず、専門の業者から借り受け、農耕する例も見られた。時にはウシが逃げ出し、勝手に貸主の元へ戻ってしまうこともあったという。ウシは博労と直接、値段の交渉し購入していた。

ウシは牛小屋で飼育された。餌はカイバ（飼葉、藁を切ったもの、蒸したムギ、米ぬか、刈った草をまぜたもの）を与えており、時々身体を綺麗に掃除した。また、ウシが排出したフンは田畑の肥料として再利用することもあった。

(七) ウマ

紀美野町では「ねじや建て」という構法を用いた家屋が見られる。ねじや建てとは、「軒の構造に特徴があり、

出柙を軒柙に対して非平行に架けることにより、主屋より突き出した牛小屋を屋敷内に取り込むもの〔千森一九九六 二〇〕である。これは雨や雪が降った際も、滞りなくウマの荷降ろしができるようにこのような作りを施したのだという。話者いわく、おそらく、高野山領であった地域は、年貢をいつでもおさめる必要があったためにこのようにしたのである、ということであった。

紀美野町におけるウマに関する民俗は現状でこの一例しか見られないが、昔は神事として競べ馬をおこなっていた、戦時中に軍馬として供出されたという話も断片的ではあるが聞かれる。

（八）ネズミ・カワネズミ

多くの家では、ネズミ退治としてネコを飼っていた。また、家に出るネズミはネズミカゴ（鼠籠）を仕掛けてネズミを捕獲した。これは駆除というよりも追い出すという意味合いが強かったのだという。

カワネズミは黒焼きにして腎臓の薬として用いた。ネズミという名が付いているが、現状でどのような動物であるかは定かではない。

（九）ウサギ

ウサギはノウサギを狩猟し、毛皮と肉は利用した。毛皮は敷物などに加工され、肉は食用とした。その他、家によつては家畜として飼育した。

（一〇）オゴロ

オゴロと呼ばれる動物の獣害が聞かれる。オゴロは水田のドジョウを狙つて畦に穴を掘つてしまう。このため畦



▲写真 10 鰻鉋

が崩れ漏水してしまう。また、畑では穴を掘り野菜を枯らしてしまう。この動物については、多くの場合モグラであると説明される。

(二一) ノブスマ

名前のみ聞かれた。これはムササビのことを指していると考えられる。

二 魚類

(一) ウナギ

昨今、ニホンウナギの個体数減少が国際的問題となっている。幼魚であるシラスウナギの乱獲や全国的な河川状況の変化により姿をみかけることは少なくなった。現在の私たちにとっては天然もののウナギは高級品であるが、本来ウナギは比較的水質や水量の変化に対して耐性のある魚類であり、かつてはおおよそその河川でみられた。それゆえ、聞き取り調査では頻繁に捕獲についての語りが聞かれる。

ウナギの漁法について問うと、まず挙げられるのがウケ(筥)による捕獲法である。⁽⁸⁾ウケとは円錐形や徳利型にした簾などに漏斗状の口をつけて入った獲物が出られないようにする仕掛けである(日本民具学会一九九七)。紀美野町では胴部分に竹筒を用いたウケがよく使われていた。ウケにはウナギの好む餌としてミミズや魚の内臓を入れていた。また、真

国川流域では餌にドジョウを用いる場合もあったようである。興味深いのは、餌として用いるドジョウは「田んぼにいるドジョウではなく、川にいる縞々のドジョウがよい」とされている点である。正確な同定はできないが、真国川のような流れのある河川に生息し、体表に縞模様を持つドジョウとはシマドジョウであろう。個人消費にとどまる魚類に対し、餌の嗜好性まで加味して漁をおこなう点からは、ウナギが食物として重宝されていたことが分かる。

ウナギの漁についてはもうひとつ、水底の泥の中にひそむウナギを、道具を用いて引っかけて捕るウナギキリについて語られることが多い。ウナギキリでは、山樵道具の鎌や鋸のほか、「先が曲がった鎌のような」道具を用いたという。これはおそらく、鰻搔きと呼ばれる漁具であろう〔日本民具学会 一九九七〕。この道具については民具学の観点から今後の聞き取りが必要であるが、和歌山の他の地域でも採集されているため、紀美野町でも使用されていたと考えてよいだろう。ウナギキリは主に水田や用水路といった水域でおこなわれるが、まれに道を這っているウナギを引っ掛けることもあったという。ウナギは皮膚呼吸によって短時間ならば地上に上がることができ、大雨や洪水の後に道を這っていたという例もある。おそらくそういった際に捕獲したということであろう。なお、ウナギキリの際にウナギを挟むための歯が付いた専用の鋏も使われた（写真10）。この道具に関しては、一般的には鰻鋏と呼ばれている〔日本民具学会 一九九七〕。

ウナギキリについての特徴的な点は、ウケ漁は主として男性から語られるのに対し、こちらは比較的女性からの語りも多いことである。事前に餌を用意し、ウナギの生息域を考慮したうえで仕掛けるウケに比べ、ウナギキリは道具ひとつで手軽に漁が可能であったことが要因であろうか。

釣り糸と針を用いた方法については以下のふたつがみられた。ひとつはウナギトリである。これは、日中ウナギが潜んでいる穴や、ガマと呼ばれる川底の石場を狙っておこなわれる漁法である。糸を結んだ針に餌をつけ、それ

すって川上から流す。これらの方法をとる、サンシヨウに含まれる成分で魚を痺れさせ捕獲する漁法である。なお、現在は毒流しの一種として禁止されている。

以上は日中もしくは夕方を想定したものであるが、活動時間である夜間にウナギを狙うこともあった。その際は夜の川を松明やカーバイドランプで照らしながら、モリ（蛸、ツキとも呼ばれる）で獲物を突き刺し捕獲した。これはヨグリと呼ばれている。ちなみに、松明の光は揺れて獲物が逃げるが、カーバイドランプ（写真11）が発する光は魚を驚かせることがなく、これは夜間の漁と相性が良かった、と語る方もいた。

様々な手法で捕獲されるウナギであるが、体表が滑りやすくなかなか掴みにくい。だが、表面がザラザラしているフキの葉で掴むと滑らず掴めた。こうして家へ持ち帰ったウナギは背開きでさばき、蒲焼きにして食べた。



▲写真11 カーバイドランプ

を竹筒の先に引つ掛け、ウナギがひそむ場所へそれを送り込み、釣り上げるのである。もうひとつはツケバリである。ウナギの生息する河川に、餌となるアユなどを針につけ、それを結んだ糸を仕掛けておく。後日、かかったウナギを捕獲する。これは、いわゆる延縄漁のことである。

その他、河川でのサンシヨナガシ（山椒流し）でも捕えられた。サンシヨナガシとは、青い状態のサンシヨウを布袋に入れて水中で揉む、もしくはすり鉢で

(一) アユ

紀美野町では主に、以下のふたつの方法でアユ漁がおこなわれていた。ひとつは全国的に広くおこなわれている友釣りである。友釣りとは、縄張り意識が強いというアユの性質を利用し、オトリのアユに糸と針をつけ、攻撃してきたアユを引っ掛けて釣りあげるものである。藻類を食べるため、餌釣りが困難なアユを釣るための実に合理的な方法である。

もうひとつはアミイレ（網入れ）と呼ばれる方法だ。アミイレとは、河川を網で区切り、その区間の漁業権を買い、おこなわれる漁撈である。アミイレは美里地区が発祥とされており、現在でも貴志川漁協協同組合が中心となり8月最後の日曜におこなう。アミイレの漁業権は、区切られた箇所⁽¹⁰⁾の魚類の多少によって値段が変動していたという。この時、ヒツカケという道具でアユやその他の魚類を捕獲した。ヒツカケは自給され、遊びの際などアミイレ以外でも用いられたという。

こうして捕獲されたアユは塩焼きのほか、鮎寿司に加工する、出汁用や煮物用の干物にするなどして利用された。また、番茶でアユを煮るという調理法も聞かれた。

ところで、アユに関しては漁業の対象魚としての需要が高く、地元漁協による放流もおこなわれている。紀美野町では、湖産と呼ばれる琵琶湖で養殖されたものや、海産と呼ばれる海で稚魚を捕獲し養殖されたものを放流している。湖産のアユは天然のアユと比べ、体の黄色の斑点が濃くあらわれ縄張り意識が強いのだという。また、海産のアユは湖産のアユと比べ体長が大きくなるようだ。天然のアユと放流されたアユでは明らかに特徴が異なることを、紀美野町の人々は経験的に知っているということである。なお、最近のアユは昔のアユと比べて砂をよく吐くようになったというが、これは放流されたアユの特徴であるのか、河川環境の変化によるものであるかは定かでない、今後の調査が求められる。

(三) コイ

紀美野町を流れる貴志川、真国川は水温が低く水の流れが速いため、コイはあまり生息していないようである。それでも、一部、生息していた地域では、川遊びとして捕獲されたり、麩や蒸したイモを餌に釣りの対象ともなっていた。

なお、コイを水田に放ち養育する農家もあった。稚魚を放流し、食用のために育てていたとのことであるが、副次的には雑草の抑草効果もあったのではないであろうか。なお、隣接する自治体である和歌山県高野町花坂地区では、ニシキゴイをイロゴイと呼び、その血は薬として産後の体力回復に用いた、という話が聞かれたが、ここでは聞かれることはなかった。

(四) ギギ

ギギとはナマズ目ギギ科の魚である。紀美野町ではギンギとも呼ばれている。全長は最大で三〇センチ程度で、掴まれた際に「ギーギー」と威嚇音を出すことが名前の由来といわれている。紀美野町では、ギギは蒲焼きや白焼きにして食された。そのほか、ギギから取った出汁で素麺を食べたこともあったという。近年、ウナギの代替魚として食用ナマズについて研究が進んでいる。これはナマズの肉質や風味が、ウナギのそれに近いからであるが、紀美野町では古くよりこのことが経験的に知られていたということであろう。

その他には、民間薬としても用いられた。ギギを丸ごと焼き、煎じたものは肺炎に効いた。

(五) ウグイ

紀美野町では、ウグイはアユの放流に伴い見られるようになったようだ。そしてなぜか、貴志川に生息している

が、真国川には生息していないという。この理由は定かではない。だが、数名の話者によると、貴志川は昭和二八年（一九五三）の大洪水の発生後、河川環境が劇的に変化し、その後の護岸工事も重なって大きく変質を起したようである。このことが起因しているのかについては、民俗学からだけでなく、生物学的観点からも今後の調査が待たれるところである。

（六）アカザ

名前のみ確認できた。特に利用法などについては聞かれておらず、今後の調査に期待したい。

（七）セジャコ・ハイジャコ・フチジャコ

魚類について聞き取りをおこなうと、ジャコという名をしばしば耳にする。ジャコとはいわずもがな「雑魚」のことであるが、そこには「セジャコ」「ハイジャコ」「フチジャコ」という呼び分けがみられる。セジャコとフチジャコの名前については、その生息域を表しているという。すなわちセジャコは瀬に、フチジャコは淵に生息している魚ということである。

では、これらの魚は一体、今日のどの種類を指すのであろうか。まず、和歌山の魚類について網羅的な研究を残した宇井縫蔵（註1）の『紀州魚譜』の記載について紹介する。宇井は『紀州魚譜』のなかで、オスのオイカワをアカブト、メスのオイカワをハイ、またはハイジャコと紹介している（「宇井 一九二五」）。筆者らの聞き取りによる同定の結果、ハイジャコに関しては上記の記載と同じ結果を得ている。だがセジャコとフチジャコについては言及されていない。

次に、本調査で得られた見解を紹介する。聞き取りの結果、セジャコとはオイカワの、フチジャコとはカワムツ

のことを指していると思われる。⁽¹²⁾ また、カワムツに関しては、オスをアカブトと呼んでいたようだ。以上のことを総合すると、セジャコ・ハイジャコ・フチジャコとはコイ科の魚類の総称であると考えられる。コイ科の魚類は、オスが繁殖期になると婚姻色と呼ばれる鮮やかな体色に変化する。他方で、メスは単色で比較的地味な体色である。このため、たとえ同種であつても別種のように感じられたのではないだろうか。つまり、オスのオイカワ、カワムツの婚姻色のものをアカブト、それらのメス、もしくは婚姻色のみられないものをそれぞれハイジャコ・フチジャコと呼ぶと考えられる。

この三種は利用法にも多少の差がみられる。セジャコ・ハイジャコは骨が軟らかく、カキの葉で包んでジャコ寿司にして食したという。特にハイジャコは寿司屋へ出荷されることもあつたようである。だが、フチジャコは骨が硬く、あまり寿司には向かなかつたようだ。

(八) ノメ

紀美野町で伝承・昔話について聞き取りをおこなうと、「串跡のある魚」⁽¹³⁾の話をしばしば耳にする。ここに登場するのがノメという魚である。このストーリーについては末広恭雄の『魚と伝説』にまとめられているのでここで紹介したい。

昔々、この玉川のほとりで、一人の男が釣りたての魚を串に刺して焼いて食べようとしていたところに弘法大師が通りかかった。大師はその様子をみて、魚のために強い仏心を起されたい。その男にいくばくかの錢をやつてその焼きかけの魚をゆずりうけた。

ところで男だが、大師が魚を買つたのは食べるためだと思つた。しかし大師はその魚を食べもせず、川の中

に投げ込んでしまったので、もつたないことをするものだ、その男はいぶかったが、その直後に起つた奇跡を目の当たりにして、すっかり驚いてしまった。

「……」その魚が生きて泳ぎだしたのである。そして水の上からその魚をみると、刺した串あとがハッキリその背に残っているではないか。「末広 一九七七 三四・三五」

このノメという魚であるが、聞き取りではいったい今日のどの魚種であるかは分からなかった。だが、『紀州魚譜』で、宇井はこの伝承について以下のように述べている。

餘り古くよりの傳説ではないやうであるが、高野山の奥の院御廟の前を流るゝ玉川に棲んでゐる魚は「昔弘法大師が魚串にさゝれて將に焼かれんとしたものを助けて放つたもので、この川にすんでゐる魚に限り、背中に魚串の跡が残つてある」といひ、之が高野山の一名物になつてゐる。その魚串の跡があるといふ魚は、即ちアブラハヤであつて、生時水中を泳いでゐるとき、背鰭が淡黄色の斑點に見江、それが丁度魚串の跡のやうにも見江るのである。この魚は高野の玉川に限らず、普通とはいへぬが往々山間の溪流に見出される。併し土地によつてはタカハヤやカハムツが弘法大師の助けて逃した魚といつてゐるが、これ等の魚の背鰭も亦水中で淡黄色の斑點に見江る。〔宇井 一九二五 三三・三三〕

宇井は、ノメをアブラハヤと同定している。また、地域によつてはこの伝承の魚がタカハヤやカハムツであるとも述べている。ところで、大正一三年（一九二五）に書かれた書籍にあつて、それほど古くからの伝承ではないとも付け加えている。これはどういったことであろうか。

美里市教育委員会より発行された『美里の自然』では、和歌山大学教授の牧岩男の言として、和歌山県にはタカハヤしか生息していないとの記載がある。だが一方で、和歌山県立自然博物館の学芸員の主張では、アユの放流に混入したアブラハヤにより生息域のかく乱が起こっているともある〔前田 二〇〇五〕。事実、和歌山県立自然博物館の調査研究の結果、高野町花坂地区にのみアブラハヤが生息していると結論づけている〔和歌山県立自然博物館 一九九五〕。残念ながらいつ頃からかく乱が起こったのかまでは分らないが、少なくともアユの放流が始まった明治以降のことであろう。であるならば、紀美野町の伝承にあらわれるノメはアブラハヤでなくやはりタカハヤと考えていいのではないだろうか。その後、アユの放流に伴い移入した近縁種のアブラハヤはその姿が酷似していることからノメと呼ばれてきた、と推測できる。今日的な環境問題が民俗にも影響を及ぼした例とも考えることができる。

ノメという呼び名は体表がぬめぬめしているところからきているといい、ヌメリバイとも呼ばれている。あまり食物としての利用もなされず、上記の伝承について以外では子どもたちの川遊びでの釣りの対象魚として名が挙がるにとどまる。⁰⁴なお、初生谷ではノメは見られないという。

(九) トクジン・トクチ・トクツチョ

トクジンは口が細く、主に釣りの対象魚となっていた。聞き取り調査によるとこれらの名前で呼ばれる魚はムギツクであるという。『紀州魚譜』ではムギツクの方言名としてトグチ、トグチバイと説明され〔宇井 一九二五〕、ムギツクのそれとみて間違いないであろう。

(一〇) ネホウ

ネホウは根（水の底）を這うからこのように呼ばれたそうである。紀美野町での聞き取りの結果、カマツカのことを指すと分かった。これは『紀州魚譜』の記載と相違なく「宇井 一九二五」、おそらく間違いはないであろう。

(一一) ゴリ

『ゴリ押し』という言葉があるが、この語源となった魚がゴリである。この名は比較的良好に知られた方言名である。ゴリとはヨシノボリなど淡水性の小型ハゼの総称である。紀美野町でもウケなどで獲られた魚である。なお、

「ゴリの大きいもの」も河川にいたということであるが、これはカジカやドンコのことではないだろうか。ゴリの利用法はあまり聞かれなかったが、大型のゴリは食べたようだ。

三 鳥類

(一二) ヒヨドリ

紀美野町での鳥類に関わる民俗でもっとも耳にするのは、ヒヨドリについてである。ヒヨドリは大変美味しい鳥で、好んで狩猟の対象となった。ハゼの実などを食べにやってきたヒヨドリを空気銃やオシ（庄し）、もしくはベタオシという罠で狩った。オシは竹製のもの⁽¹⁵⁾が確認されているほか（写真12）、山野にて草や木の枝で簡易的に作成もした（写真13）。オシは比較的小規模な狩猟の方法であったの



▲写真 12 竹製のオシ（撮影：絹川諒介）



▲写真 13 簡易的なオシ
(撮影：藤田悠人)

で、子どもの遊びとしてもおこなわれていた。その他にはかすみ網によって捕獲された。

(二) メジロ

メジロは緑黄色の体色で、その名の通り目の周りが白く美しい小鳥である。そのために愛玩用に飼育される例がしばしばである。鳥籠に入ったメジロを野外に置いておくと、その鳴き声を聞いて野生のメジロが集まってくる(この時、鳥籠に入っているメジロをトモと呼ぶ例も

ある)。そして近づいたメジロをヤドリの実を噛んで作ったモチ(とりもち)で捕獲した。

飼育されたメジロはその鳴き声を愛でた。メジロが美しく鳴くことをタカネ、鳴かせることをタカネキラスという。美しくかつ長く鳴かせるためには力をつけさせる必要がある。その際にはフナの粉を食べさせた。

(三) ヤマガラ

フィールドワークの最中、野生のヤマガラ(写真14)と遊んでいる方を幾度か見かけた。ピーナッツやヒマワリの種を手のひらに置き待っていると、ヤマガラが飛んできて餌を啜えて飛び去っていくのである。ヤマガラは頭の良い鳥で、ヤマガラによる芸は日本各地でかつては見られた「小山 二〇〇六」。日々の仕事の合間、一休みがてらにヤマガラと戯れてその疲れを癒していたのだろうか。



▲写真 14 手に降り立つヤマガラ

(四) スズメ

全国例に漏れず、稲作の害鳥としての語りが聞かれた。イネが実る前を狙って水田にやってくるため、ガス鉄砲で追い払った。また、食用として利用するため、オシや籠を使って捕獲し、塩漬けにした。なお、集団で住むスズメと家に住むスズメを区別しており、前者はノラスズメと呼んでいた。そんな身近な存在であったスズメだが、近年では生息数が減っているという。

(五) ニワトリ

今日のように鶏肉・鶏卵が手軽に購入されるようになる以前は、家々で家禽として飼育されていた。飼育の形態は、放し飼いや鶏舎の利用などまちまちなものである。餌にはコゴメ（割れた米）や野菜くず、タニシの殻を、ボレー粉と同じく、ミネラル分の補給と鶏卵の殻を硬くさせるために与えていたと考えられる。タニシの殻は、砕いたものを与えていたという。タニシの殻は、ボレー粉と同じく、ミネラル分の補給と鶏卵の殻を硬くさせるために与えていたと考えられる。

(六) キジ・ヤマドリ

「キジも鳴かずに撃たれない」「けんもほろろ」という言葉があるように、キジはその鳴き声が注目される。紀美野町では、狩猟の話に続いて、キジが地震の前に鳴くという話が聞かれる。これはキジの足裏が振動を敏感にとらえるためだと考えられている。

キジ仲間であるヤマドリもキジと同じく狩猟の対象であった。食用として利用する他、美しい羽根は装飾としても用いられた。

四 爬虫類

(一) くじ

へびについてもっとも多く聞かれるのがマムシの利用についてである。紀美野町では、マムシはハビという方言名で呼ばれている。ハビは頭を押さえ、首を掴んで捕獲する。捕まえたハビは、直接その身を利用する場合と、いわゆるマムシ酒に加工して利用する場合が見られた。以下にその民俗を紹介したい。

まずは直接ハビの身を利用する場合である。捕獲したハビは皮を剥いで乾燥させ、炙って食べた。フィールドワークの中で、何度か軒下に干されたマムシを確認している。そのようにして乾燥させたハビは、民間薬としても



▲写真 15 マムシ

利用された。粉末にしたハビに、黒豆やゴマの粉と一緒に混ぜて薬として飲んだ。ハビの頭を煮て、煮出した湯を飲むと熱冷ましの効果があったのだという。剥がされた皮は乾かし傷口に貼ると化膿止めになり、傷の治りが早かった。また、滋養強壮のために生のままぶつ切りにして食べることもあった。

次はマムシ酒に加工する場合である。ハビはすぐに酒に漬けず、まずは中ほどまで水を張った瓶にハビを入れておく。これはハビにフンを出させるため

である。そのようにした後には、焼酎に半年から一年ほど漬け込み、数倍に希釈して飲む。これは万病の薬として重宝されていた。また、その酒は痛み止めとして直接患部に塗られることもあった。

以上はマムシ、つまり有毒ヘビについてである。その他、紀美野町ではわずかであるが無毒ヘビについての語りも聞かれた。長谷宮では、「白玉のおばさん」という拝み屋について話を聞いた。竹藪に住む白玉さんと呼ばれるシロヘビがおばあさんに乗り移ったのだという。白玉さんには、身体の不調や失せものについて伺いを立てていた。その他、初生谷ではヘビが塊になつてゐるヘビヅカ（蛇塚）を見かけたという。円明寺では、二メートル以上のアオダイショウがいたといい、山の主ではないかといった。アオダイショウはイエマワリとも呼ばれており、家や蔵に入るものの、悪さなどはしなかった。アオダイショウは民家の近くに棲むことが多く、屋根裏のネズミなどを求めて家屋に侵入することもある。おそらくはその様子から連想された呼び名であろう。以上の無毒ヘビについては、貴志川・真国川の上流部にいまだ民俗が残るといふことが分かった。

（二）カメ

紀美野町ではカメは珍しく、捕まえると甲羅に名前や生年月日などを刻銘し、川に逃した。こうすることで、悩み事などを流してくれるのだという。この民俗については、筆者は兵庫県豊岡市や大阪府八尾市、和歌山県高野町でも確認しており、少なくとも関西の一部地域ではみられる民俗であるといえる。また、捕まえたカメには酒を飲ませて逃したという。実際にはほとんど飲まないのだが、こうすることは縁起が良かったという。なお、これらに近似した民俗例はウミガメに対してみられる〔藤井 二〇〇八など〕。

五 昆虫類・甲殻類・多足類

(一) ハチ

紀美野町を歩いていると、蓋のついた木箱が木陰に置かれている光景を目にする。これはミツバチの巣箱である。当地では昔から養蜂がおこなわれている。

ハチの巣箱にはスギがよいとされる。ヒノキで作った巣箱は、その芳香のためであろうか、ハチが寄り付かないのだという。内部にミツロウ（蜜蝋）を塗った巣箱を三月に置くと、五月、六月にハチが入り分蜂（巢分かれ）がはじまる。現在はキンリョウヘンというランの一種の香りを利用することでハチの誘引は容易であるが、かつてはただ飲まず食わずで待つのみであった。蜂蜜のことをアメと呼び、六月ごろに採集する。アメを採集した後、ハチが越冬するための餌用のアメを与える。現在これは市販されているものを用いている。

巣箱にはツツガムシ（ガの一種）が産卵し木材を食い荒す。そのため、巣箱を水中に沈め殺虫した。



▲写真 16 巣箱の内部



▲写真 17 巣箱（蜂洞）

また、紀美野町では丸太で作られた巣箱もみられる。これは伝統的な和蜂（ニホンミツバチ）飼育の巣箱で、一般的に蜂洞と呼ばれ、対馬の例がよく知られている〔渡辺 二〇〇二〕。

養蜂以外のハチの利用としては、ハチノコと呼ばれる幼虫を食用に利用した他、魚釣りや漁業の餌にもした。

（二）トンボ

「日本」の古称を秋津島というが、この秋津とはトンボのことであるという。それほどまでに日本人に親しみ愛されたトンボは、子どもたちの遊び相手でもあった。トンボを捕る時、竹竿の先にモーチを付け、そこにトンボを粘着させて捕る⁽⁹⁶⁾。市販のとりもちでは粘着力が強いため、ヤドリの実を噛んだモーチがちようどよいものであった。なお、本調査では、昭和二十一年（一九四六）以降が生年の話者はこの捕獲法を知らなかった。

（三）カイコ

現状、平野地区と初生谷地区で養蚕について確認された。そのうち、平野地区では詳細に養蚕の様子が語られている。

現在の畑の場所はかつて一面がクワ畑であった。通常、カイコは一年に三回のサイクルで飼育するが、この地区では四回もおこなわれていた。ここから、養蚕業が非常に盛んであったことが分かる。五、六月の田植え前になるとカイコの食い込みの時期となり、カイコヤスミ（蚕休み）として一週間から一〇日間ほど学校が休みになった。その間、子どもたちは養蚕所でカイコの世話に勤しんだ。養蚕所では一日に四度、棚を出し入れし、フンの掃除や給餌をおこなった。時代が下ると条桑育（枝ごとクワの葉を与える育成法）を採用し、棚を外すことなく飼育が可能になった。なお、カイコにまつわる祭りや信仰は存在しないが、かつてはあったかもしれない、との

ことであつた。

(四) ウンカ・ニカメイチュウ

ウンカとニカメイチュウ（ニカメイガの幼虫）はともにイネの害虫であつた。日本本土で発生した蝗害は、イナゴよりむしろウンカとニカメイチュウによって起こされたものであつた〔瀬戸口 二〇〇九〕。ウンカやニカメイチュウが発生すると、今日では農薬で対処するが、その以前は水田に灯油を流し一面に油膜を張った後、イネに付いた虫をはたき落した。こうすることで、虫たちは油膜に包まれ死んでしまう。

(五) フシ

紀美野町の諸職のひとつに、フシの採集というものがある。フシは動物名ではなく、ヌルデの葉に付く虫こぶのことをこう呼ぶ。虫こぶとは、昆虫などからの外的刺激によつて植物の一部が異常に発達し瘤状になつたものである。⁽⁷⁾ フシはお歯黒やインクの原料になり、これを採集し販売をおこなつていた。

なお、ヌルデにできる虫こぶは「五倍子」と呼ばれ、タンニンを多く含むことから美しい黒色を発し、主に織物の染色に用いられた。日本で採集された五倍子は、一八六二年ごろから海外へ輸出されていた〔薄葉 二〇〇七〕。以上のことから、紀美野町で採集されたフシも高級品として取り扱われた可能性も考えられる。

(六) ズガニ

モクズガニのことである。モクズガニは高級食材で有名な上海蟹（チュウゴクモクズガニ）の仲間で、非常に美味であることで知られている。今日でも紀美野町の道の駅などでは盛んに宣伝され消費されている。ズガニはカニ

カゴ（蟹籠）、もしくはモンドリで捕獲する。ズガニはカニミチ（蟹道）と呼ばれる流れの緩やかなところにひそんでおり、そこに罠を仕掛ける。湯がいて食べるほか、蟹飯にもした。

（七）サワガニ

サワガニについては、唐揚げや天ぷらにして食べたという家庭もあれば、イノシシくらいしか食べない、と食用にしない地域もあった。

（八）ムカデ

ムカデは毒虫として恐れられると同時に、民間薬として重宝された。捕獲したムカデは油に漬けて傷薬にする。これは市販の薬と比較して治りが早い。なお、ユリの花を家に置いておくとムカデが寄ってくるのだという。

総括

哺乳類についての民俗では、圧倒的に狩猟に関する経験知・自然知がみられた。これはいわずもがな、狩猟を成功に導くための知恵である。だが、狩猟は恩恵を得るための手段であると同時に、恩恵を奪われることへの対処・対応という側面も持ち合わせていた。田口によると、狩猟には農耕のための防御的な狩猟（defensive hunting）と、積極的に野生鳥獣を捕らえ、生活資源または換金交換交易の資源とする攻撃的な狩猟（offensive hunting）の二重構造がみられる（田口 二〇〇二）。防御的な狩猟は集落や耕地周辺の里山でおこなわれるのに対し、攻撃的な狩猟は里山から奥山にかけておこなわれる。紀美野町のイノシシとシカに関する動物民俗は、見事に両者の構造をあらわしているといえよう。イノシシは、明らかに生活資源としての利用を求めた狩猟であった。それは猟師

集団同士の獲物をめぐる争いからも分かる。対して、イノシシに比べ味が劣るといわれたシカを、それでも狩猟するという点には防除の意識が感じられる。これはまた、シカの獣害に対する語りが頻繁であったこともその証左といえる。だが、同じイノシシ猟であっても、立岩伝承にみられるそれは明らかに防御的な狩猟であり、これらの構造は実は必ずしも対立軸ではなかったと考えられる。

魚類の民俗は、その漁法や方言名の豊かさから、非常に身近であったことが分かる。これは、紀美野町が貴志川・真国川というふたつの主要な河川を有し、それゆえに内水面漁業が盛んであったからだ。だが、それ以上に、魚類の民俗は、それを語ることができる話者の層がとても広いということが大きな要因でもあると思われる。たとえば、狩猟についての経験知は、それを生業とする者、高い技術を有する者しか言及し得ない。だが、魚類の捕獲についてはどうであろうか。専門的な漁撈、稲作の合間の水田漁撈、子どもたちの遊びとしてなど、実に多様なシチュエーションで語られるのである。稲作の一休みにウナギを捕る、水遊びとしてジャコを釣るといった具合に、それぞれの生活に寄り添う形でそこにあつたのである。

これは鳥類についてもいえることである。ヒヨドリやキジなど、組織的な狩猟をおこなうというよりは、軒下や里山で遊びがてらに狩猟をおこない、生活資源として利用する。魚類や鳥類の民俗例でみられるこういった営みはマイナーサブステンスと呼ばれ、これは遊び仕事と訳される。その名の通り、経済活動には大きく影響を及ぼさないものの、楽しみを伴い、生業をおこなう側の熱意で維持される周縁的な営みである。また、娯楽という視点からみれば、ヤマガラやメジロは愛玩動物として愛されていた。

爬虫類に関しては、ヘビとカメについてのみであったが、その内容は大変に興味深い。紀美野町では、有毒ヘビのハビ、つまりマムシとそれ以外のヘビが意識のなかで確かに分けられている。有毒ヘビのマムシには食物、民間薬としての利用がみられる反面、無毒ヘビのシマヘビやアオダイショウにはそういった民俗はみられない。これは

毒の有無が意識の違いを生んでいることはいうまでもない。マムシの持つ毒の力や生命力に、何らかの薬効を求めたであろう。また、カメの民俗については先にも述べたように、ウミガメの事例と非常に類似している。これは日本人とカメの関係を今一度考えさせるものである。

昆虫類・甲殻類・多足類については、語りの絶対数こそ少なかったものの、マイナーサブシステムの一面を持つ養蜂やズガニ漁、かつて日本を支えていた経済活動である養蚕や五倍子の採集、ムカデの民間薬としての利用など幅広い利用の民俗がみられ、注目される。

おわりに

紀美野町でみられる動物の民俗は、イネ伝来以前の、いわゆる照葉樹林文化ともいえる姿を残しつつ、日本人が稲作を選び、現在に至るまでの日本人の歴史を刻銘に記録していた。これら、書籍内の記録にとどまる民俗例が、いまだ地元の古老から語られ、息づいているという点は非常に意義深いものである。紀美野町の動物民俗は、現在の日本で、どういった形の民俗が今日にまで残り、どういったものが姿を消していくのか、また蘇ってくるのか、ということを再考するうえで重要な視点を与えてくれるのではないであろうか。

今日、急激に民俗がその姿を消している。もはや各地の民俗誌でみられる民俗は、「過去」のものとなつてしまった。そういったなかで、紀美野町では、古代、中世、近世、近代を経て、現代まで先人の知恵が生きている。人々と動物たちとの対立、共存、利用の原風景が、紀美野町には現在も鮮やかに残っているのである。

注

(1) 本論文作成時、平成二九年（二〇一七）。

- (2)野本は、人々が靈性を感じ取り、神を見出す地形をこのように名づけた〔野本 二〇〇六〕
- (3)今日のベストのような、袖が切られた上着。長澤はカモシカの毛皮で作られた例を紹介している〔長澤 二〇〇五a〕
- (4)根付のことを指すと考えられる。
- (5)イノブタの発生に関しては、地場産業として養殖されたイノブタが逃げ出したなど諸説が聞かれるが、根拠が定かでないためここではその真偽については論じない。
- (6)昭和三〇年（一九五五）指定。
- (7)市川によると、赤石・紀伊・四国・九州などの山地ではカモシカはニクと呼ばれている〔市川 一九八七〕。
- (8)紀美野町の内水面漁業では、ウケのほか、モドリ、ドウ、ゴウ、ツツンコ、ウナギツツという類似した漁具が用いられている。
- (9)なお、一般的にはこの漁自体をウナギカキと呼ぶ。歌川国芳の錦絵には宮戸川でのウナギカキの様子が描かれており〔黒木 二〇一二〕、夏の季語となるほど盛んであった。
- (10)愛知県東部の矢作川でも、天然アユと放流アユに対して、地域の人々が異なる民俗知識を得ている例が報告されている〔古川 二〇一二〕。
- (11)宇井縫蔵、明治二年（一八七八）西牟婁郡岩田村（現上富田町）生まれ。教職の傍らに植物、魚類の研究に専念し、『紀州魚譜』『紀州植物誌』などの著作がある〔南方熊楠顕彰館 <http://www.minakata.org/cnts/news/index.cgi?c=i090205>〕。
- (12)フチジャコについては、『美里の自然』にもカワムツのことであるとの記載がある〔前田 二〇〇五〕。
- (13)怪異・妖怪伝承データベースを参照すると、『旅と伝承』の記事として同様の話を紹介しているが、ここで串に

刺されて焼かれた魚類はフナとされている〔国際日本文化研究センター <http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiCard/1232181.shtml>〕。

(14) 高野山に近い花坂地区では一部、捕獲に対しての禁忌がみられるようであるが、さほど意識は強くなかったようで、捕獲はよくおこなわれていた〔高野町史編纂委員会 二〇一二〕。

(15) オシは全国で見られ、大型のオシはイノシシやクマの狩猟にも用いられた〔長澤 二〇〇五a〕。また、紀美野町でも一例だけであるが、イノシシ猟にオシを用いたという語りを確認している。

(16) 周は、同じ方法での子どもセミ採りを紹介している〔周 一九九五〕。

(17) なお、ヌルデに虫こぶを発生させる昆虫はヌルデシロアブラムシというアブラムシの仲間である〔薄葉 二〇〇七〕。

(18) 水田漁撈とは、「水田用水系において水田魚類を対象に行う漁撈のことで、稲作の諸作業によりもたらされる多様な水環境を利用して行う」〔安室 二〇〇八 一八二〕ものである。なお、水田用水系とは水路や溜池などの稲作のための人工的水界であり、水田魚類とはフナやドジョウ、タニシなど水田環境に適応した魚介類のことである〔安室 二〇〇八〕

〈参考文献〉

- 市川健夫 一九八七 『ブナ帯と日本人』 講談社現代新書
宇井縫蔵 一九二五 『紀州魚譜』 紀元社
薄葉重 二〇〇七 『虫こぶ入門―虫えい・菌えいの見かた・楽しみかた』 増補版 八坂書房
『角川日本地名大辞典』 編集委員会編 一九八五 『角川日本地名大辞典 三〇 和歌山県』 角川書店

- 黒木真理 二〇一二 『ウナギの博物誌 謎多き生物の生態から文化まで』 化学同人
- 高野町史編纂委員会編 二〇一二 『高野町史 民俗編』 高野町
- 国際日本文化研究センター「怪異・妖怪伝承データベース」<http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiCard/123181.shtml> (二〇一七年六月一日参照)
- 小山幸子 二〇〇六 『ヤマガラの芸 文化史と行動学の視点から』 法政大学出版
- 周達生 一九九五 『民族動物学 アジアのフィールドから』 東京大学出版社
- 末広恭雄 一九七七 『魚と伝説』 新潮文庫
- 瀬戸口明久 二〇〇九 『害虫の誕生―虫からみた日本史』 ちくま新書
- 田口洋美 二〇〇七 『狩猟、その具体への視点―東日本の山間部にみられる罾猟を中心に―』 香月洋一郎・野本寛 一編『講座日本の民俗学 九 民具と民俗』 雄山閣
- 千森督子 一九九六 『貴志川流域の民家の間取り形式に関する研究』『信愛紀要』 和歌山信愛女子短期大学
- 長澤武 二〇〇五a 『動物民俗Ⅰ』 法政大学出版局
- 長澤武 二〇〇五b 『動物民俗Ⅱ』 法政大学出版局
- 日本民具学会 一九九七 『日本民具辞典』 ぎょうせい
- 野本寛一 一九八四 『焼畑民俗文化論』 雄山閣
- 野本寛一 二〇〇六 『神と自然の景観論 信仰環境を読む』 講談社学術文庫
- 福田アジオ・神田より子・新谷尚紀・中込睦子・湯川洋司・渡邊欣雄編 二〇〇六 『精選日本民俗辞典』 吉川弘文館
- 藤井弘章 二〇〇八 『対馬・吉岐におけるウミガメの民俗―亀卜の里とウミガメ―』『民俗文化』第二〇号 近畿

大学民俗学研究所

古川彰 二〇〇八「アユの来歴」 山泰幸・川田牧人・古川彰編『環境民俗学 新しいフィールド学へ』 昭和堂

前田玄津二 二〇〇五『美里の自然』 美里町教育委員会

南方熊楠顕彰館 <http://www.minakata.org/contents/news/index.cgi?c=i090205> (二〇一七年六月一日参照)

安室知 二〇〇八「復活、田んぼの魚捕り―現代社会の水田漁撈」 山泰幸・川田牧人・古川彰編『環境民俗学

新しいフィールド学へ』 昭和堂

森下誠 二〇一六『長谷毛原今昔物語 村の明け暮れ』 元氣長谷毛原会

りら創造芸術高等専修学校編集・発行『論文 真国川流域の納豆文化』

和歌山県立自然博物館編集・発行 一九九五『有田川の淡水魚 魚を取り巻く環境の変化』

渡辺誠 二〇〇七「物質文化史としての視座から」 香月洋一郎・野本寛一編『講座日本の民俗学 九 民具と民

俗』 雄山閣

話者一覧

赤坂恵子さん(昭和一八年生まれ、西野)、赤坂啓子さん(昭和二一年生まれ、西野)、井奥泰臣さん(昭和一〇年生まれ、真国宮)、井本春子さん(昭和一五年生まれ、西野)、上柏皖亮さん(昭和一四年生まれ、毛原中)、上野尻宗央さん(昭和二三年生まれ、真国宮)、上村安男さん(昭和二二年生まれ、井堰)、金田輝治さん(昭和七年生まれ、西野)、金田和子さん(昭和一四年、西野)、神崎博介さん(昭和一四年生まれ、毛原中)、坂昭男さん(昭和九年生まれ、初生谷)、志賀谷豊治さん(昭和一〇年生まれ、志賀野地区)、品川文子さん(大正十三年生まれ、西野)、芝街雄さん(昭和一二年生まれ、蓑垣内)、上段順弘さん(昭和一八年生まれ、真国宮)、大東京造さん

(大正一四年生まれ、東野)、田津原カツ子さん(大正三年生まれ、西野)、栃谷宜呂さん(昭和七年生まれ、真国宮)、中家喜久司さん(昭和四年生まれ、井堰)、中絵図美年子さん(昭和一六年生まれ、西野)、中前忠和さん(昭和一七年生まれ、養垣内地区)、長峯カツ子さん(昭和七年生まれ、西野)、中山順造さん(昭和三四年生まれ、国吉地区)、西垣内好子さん(昭和八年生まれ、西野)、西山一太さん(昭和九年生まれ、西野)、西脇哲子さん(昭和一一年生まれ、東野)、西脇崇光さん(昭和三年生まれ、東野)、福岡恵子さん(昭和一四年生まれ、谷)、福岡正富さん(昭和一三年生まれ、谷)、部屋勇さん(昭和三年生まれ、北平野)、前全泰さん(昭和三年生まれ、東野)、道上キミエさん(昭和元年生まれ、長谷宮)、南節子さん(昭和二七年生まれ、真国地区)、森下夏子さん(昭和二年生まれ、西野)、森下誠さん(昭和一〇年生まれ、毛原上)、森谷昌子さん(大正一二年生まれ、養津呂)、森谷泰文さん(昭和三五年生まれ、養津呂)、弥六祥功さん(昭和一七年生まれ、東野)、弓庭武彦さん(昭和八年生まれ、毛原宮)(五十音順)

調査者一覧

大野真奈、岡島颯斗、樫村友里、絹川諒介、木村綾夏、角谷康浩、高村輝、俵和馬、鶴長愛佳、寺内千賀、飛世悠太、藤田悠人、森島友樹、山口柊太、山口真由(五十音順)

付記

本調査では、話者一覧で紹介した方々以外にも、多くの紀美野町の方が快く聞き取り調査をお受けくださいました。

このほか、藤井弘章氏、上田貴子氏、櫻木潤氏、白水士郎氏には調査・研究に関してご教示をいただきました。

お世話になった皆様に対し、ここに感謝の意を表します。

なお、写真については特に注記のない限り筆者の撮影したものである。